



私の略歴

「高専入学から現在まで」

都立産技高専 吉田喜一

都立航空工業高専は6年前に品川の都立工業高専と統合されて、都立産業技術高専・荒川キャンパスになりました。そのあと『東京都』から『公立大学法人首都大学東京』というわけのわからない名前の法人に移管されました。つまり東京都の公務員かられっきとした労働者階級の一人になりました。公務員の定年は60歳ですが、公務員時代から高専教員の定年は63歳でした。都立高専が法人化されて私より若い先生（現在62歳以下）は定年が65歳になり、私より年上の先生は63歳定年でした。

私は1948年（昭和23年）に日暮里で生まれ、現在63歳の団塊世代です。誕生日が1月の早生まれなので今年度中に64歳になります。私の年だけ過渡的に定年は64歳になりました。これはつまり年金の関係です。というわけで公務員であれば今年の3月に定年退職でしたが、来年（2012年）の3月に定年退職になります。

都立航空高専は1962年（昭和37年）4月に開校しました（つまり私が中学3年の時）、私はその機械工学科2期生です。

航空高専卒業後、通産省に入省しました。重工業局・重工業課技術班という部署で技術導入、技術輸出の審査や公害基本法、機械工業振興臨時措置法に関係しました。上司は今沖縄県知事の仲井眞さんでした。仕事はとてもやりがいがあり、大変楽しいけれども楽しいものでした。入省して少したつて、私の高専時代の卒業研究の指導教授から高専の助手で戻ってこないかとの話がありました。いろいろありましたが、1年で通産省を辞めました。

そして機械工学科助手、講師、助教授、教授となり現在に至ります。高専は今年で創立49年です。したがって49年中最初の1年と通産省時代の1年いないだけで、高専に47年間お世話になったことになりました。

この間23歳から都立大学の機械工学科（B類といって主として夜間）にお世話になりました。

当時都立大学は昼夜開講制といって朝から夜までが大学でした。他大学の1部、2部と違って同じ先生が昼間も夜も有名教授が教えてくれました。おもに夜間ですが、昼間の授業も都合がつけば自由にとることができました。B類は5年制でした。したがって28歳で在職のまま大学を卒業しました。その後、41歳の時、1989年（平成元年）3月博士論文工作機械の振動と加工精度に関する研究では千葉大学にお世話になりま

した。また45歳の時には州立マサチューセツ大学（アメリカ）で在外研究する機会を得ました。いろいろな面で大変貴重な経験をすることができました。

研究の合間にやっていたのですが、最近では子共用の遊具の開発と理論解析も大きなウエイトを占めるようになりました。特に投げてまた自分のところに戻ってくる遊具（ブーメラン紙飛行機、ブーメラン竹とんぼ、ブーメラン紙コップ等）はテレビや新聞に取り上げられました。荒川産業展でもやります。また地域の中小企業の方々と一緒にものづくりをやってきました。

学生で5年間、教員で42年間南千住に通ったことになりました。たぶんこの記録は破れないと思います。なぜなら現在助手でも博士の学位がなければほとんど採りません。その上、助手は採らないで助教（かつての講師相当）から採るようになったからです。来年度は若干の非常勤講師を頼まれていますが、もう少し南千住に通うことになりました。

吉田先生とのお付き合いは10年以上になるでしょうか。南千住が大好き、お酒が大好き、人が大好き。

お酒を飲んでいない時は結構シャイな方です。研究熱心で、先生の教授室はうず高く本が積み上げられています。今後の吉田先生の活躍が楽しみです。